



研修の現場から

研修コースの向上のために「道路技術」

札幌市では、国の社会経済発展に欠かせないインフラである道路セクターに携わる技術者を対象として、道路の計画、建設から維持管理に至る内容で研修を実施し、1996年から10年にわたり38カ国から延べ54名の研修員を受け入れてきました。

2006年度から開始する「道路技術Ⅱ」コースの研修カリキュラムにフィードバックさせるため、これまでの研修成果と共に、道路セクターの課題と道路状況を確認するため、2005年11月12日～27日の日程でザンビアとガーナの調査を行いました。

Trunk Road(日本の国道にあたる)は海外からの援助によって建設されていることから、札幌市の道路とほとんど変わらないレベルで、建設後年数を経過していない路線は損傷などは見られませんが、Urban Road(市道)などでは財源不足により維持管理が十分なされていないところが多く、穴が放置され舗装部分を人が歩き、脇の未舗装部分を車が通行するような現状も見られました。また、地方についてはほとんどが未舗装で土埃の中を人が歩いている状況でした。

研修員は札幌市で道路行政全般について学んだ幅広い知識を、各種の道路プロジェクトのリーダー的な立場で様々な問題解決に活かしているとのことで、上司からも高い評価を得ていました。

今回の調査から本市の今までのカリキュラムは大変有効であったことが確認されましたが、これまで理解できていなかった多くの問題を新たに認識できたことから、それらを反映するとともに幅広い知識の付与だけではなく問題解決能力の向上に寄与できる研修となるようカリキュラムを改善したいと考えています。

(札幌市建設局 星野)



左上:札幌市での研修の様子。道路舗装の実習を行っています

左下:ザンビア、ルサカ市の都心部の交通渋滞

右上:ガーナの地方の道路のほとんどは未舗装でした。土ぼこりの中を人が歩いています

右下:ザンビア、一般的な道路の状況。舗装部を人が歩き、脇の未舗装部分を車が通行しています。維持管理が十分になされていない、穴が放置されている箇所もあります



途上国の現場から

学校の先生たちがカンボジアで様々なことを考えました
～教師海外研修(北海道地域) 現地報告～

JICAでは、学校の先生方が実際に開発途上国を訪問し、開発途上国の人々やそこで国際協力にたずさわる日本人と「であい」、また開発途上国の様々な問題を実際に自身の目で見ることによって、開発途上国のおかれている現状や開発途上国と日本との関係、そして国際協力への理解を深めていただくことを目的に「教師海外研修」を毎年実施しています。

今年度は平成18年1月5日～14日の日程でカンボジアを8名の北海道の先生方が訪問しました。ごみ山の視察、現地の小学校や幼稚園教諭育成校で活動する青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、プノンベン大学で日本語を教える青年海外協力隊の活動視察・意見交換、カンボジアの学校の先生方との意見交換、ポルボト時代の虐殺や内戦等に関連した施設(キリングフィールド、地雷博物館等)への訪問等、様々なプログラムが組まれた密度の濃い10日間でした。そして、何よりもカンボジアの方々笑顔にふれた10日間でした。

(JICA札幌 荒)

一参加した先生方より

- 「情報の不確かさについて考えた。そして、限られたイメージだけで一つの国を捉えるあやうさについて。カンボジアに対しては、『女性や子供が被害を受けた国』『地雷の多い国』『貧しい国』『アンコールワット等世界遺産の国』といったイメージがあった。これらのイメージが間違いではなかったところもたくさんあった。一方、国民は若く、元気で、のんきで、やさしくて、そして時には狡猾だった。そして、カンボジアへのイメージが変わりました」
- 「カンボジアの子供たちのおかれている状況、学校に来られない子、鍵盤ハーモニカをみんなで大切に使うこと、体育を裸足でやる子、腹筋のできない女の子達、英語力の高い子供、栄養失調になる学生達、など見てきた事実を伝え、日本の子供たちに自分たちの目線で考えさせたい」
- 「カンボジアで接した、また感じた『地雷』『物乞い』『文化のちがひ』等を活用してモラルジレンマをテーマとした教材を作成していきたい」



上:山口隊員(体育)の授業風景

左上:カンボジアでごみ山を視察する先生たち。ごみ山の状況、ごみ拾いで生計をたてている子供等を見て、衝撃をうけました

左中:草の根技術協力「武器回収・農村開発事業」を訪問し、回収された銃を手に取る先生

下:プノンベン大学で日本語を教える青年海外協力隊員(北海道出身)。先生方も授業に参加し、カンボジア人の学生の日本語の挨拶の相手をしました

